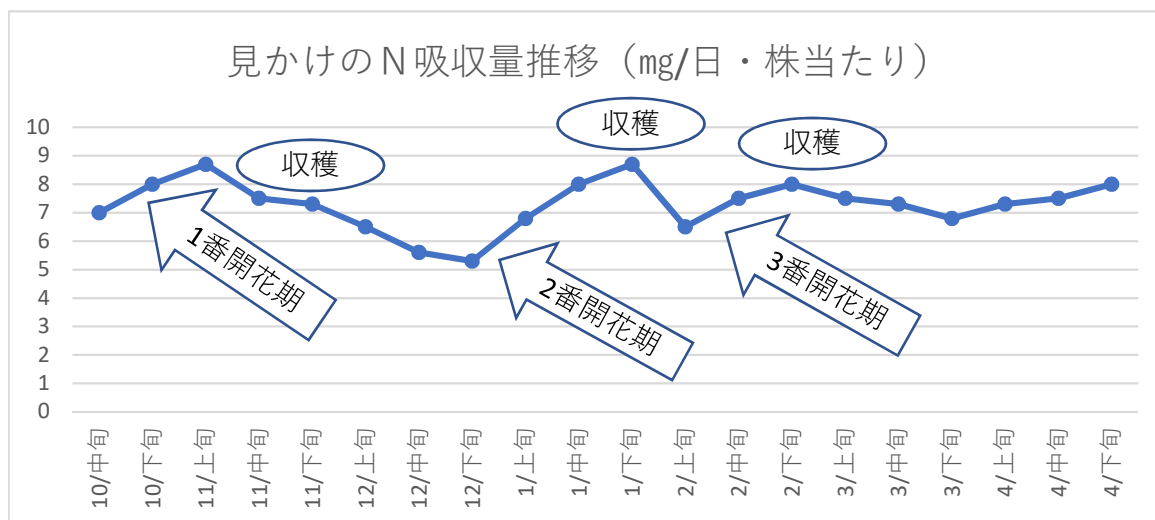


## 日中のCO<sub>2</sub>焚きでの効果的な施肥について②

R2.10

アグリ技研（株）

### 1.株当たりの硝酸態窒素吸収量の推移（一般的品種）



#### ①吸収量の動き

- (1)株当たり吸収量で平均で6mgを吸収します、CO<sub>2</sub>効果では8mgまで高くなる。
- (2)各果房の開花の2～3週前から高くなり開花後にピークとなる。
- (3)追肥は出蕾期から徐々に行って肥大期にかけて行う。

#### ②土壌中の肥料濃度（土壌15cmでの濃度）

- (1)生育中の硝酸態Nは、開花前後には5～10kg/10a当たりの維持
- (2)肥大促進期のカリ成分は、10～25kg/10a当たりの維持
- (3)養液や土壌中のECの場合は、0.5～0.7前後の維持

#### N成分5%の液肥(ウルル5号)の場合（灌水処理）（10a当たり）

施肥間隔	施肥間隔当たり吸収量/10a	施肥量	肥料名
2～3日間隔	220～250 g	4～5kg	ウルル5号・18号
5～6日間隔	350～450 g	7～8kg	ウルル5号・18号
7～10日間隔	500～650 g	10～12kg	ウルル5号・18号

（脱Nを考慮）

#### ③効果的追肥について

##### ①開花期～厳寒期

- (1)ウルル5号、ウルル18号、カリっとにて肥大促進を図る。
- (2)コラーゲン・ラボで厳寒期の草勢維持や品質向上を図る。
- (3)アミクエ、フシヨクフルで根域の充実を図る。
- (4)クドグリーンで光合成の活性を図る。
- (5)カル元気・有機カルトップで芯葉や果実の品質向上を図る。

